

PC技術協会の歩みについて

筒井 武徳*

1. はじめに

社団法人プレストレストコンクリート技術協会は、その前身で昭和33年(1958)2月21日に創立した同じ名称の任意団体から始まる。

古来十年一昔という言葉からすれば四昔も前から歩み続けている。また、来年には21世紀を迎える大きな節目となることから、40年に余る協会の変遷と推移を顧みて「温故知新」のたとえになればと、はなはだ不安であるが本稿に取り組みことにした。

プレストレストコンクリート(以下、PC)技術協会の歴史に関しては、協会冊子があり、会誌では、第30巻第1号(1988年1・2月号：PCの歩みと未来)、同第42巻第1号(2000年1・2月号：PCの思い出と今後)がすでにある。これらには、わが国のPC技術を確立されかつPC技術協会の発展に貢献された諸先生ならびに学識経験者によって詳細に論述されており、本稿の中で同じ項目や内容に重複の点があればお許し願いたい。

2. 協会創立の発端と経過

PC技術協会には、創立後初めて会員に送られた「会報」が残されている(写真-1)。その第1号は1958年9月1日に発行されたもので、創立の背景、PC工法に対する発起人の洞察力と情熱を知るうえで非常に貴重な資料である。以下に関係部分をご紹介します。

会報(第1号)をお送りするに当って

会長 吉田徳次郎

プレストレスト・コンクリート技術協会は発足以来半歳を経ましたが、体系ようやく整い、会報第1号を遅ればせながらお送りすることになりました。

これを母体としまして、逐次他の各学会誌に劣らない会誌となるよう努力するつもりでありますから会員諸君の御力添えを切にお願いいたします。

プレストレスト・コンクリートは我国に工業化されてか



* Takenori TSUTSUI
前(社)プレストレストコンクリート技術協会 事務局長

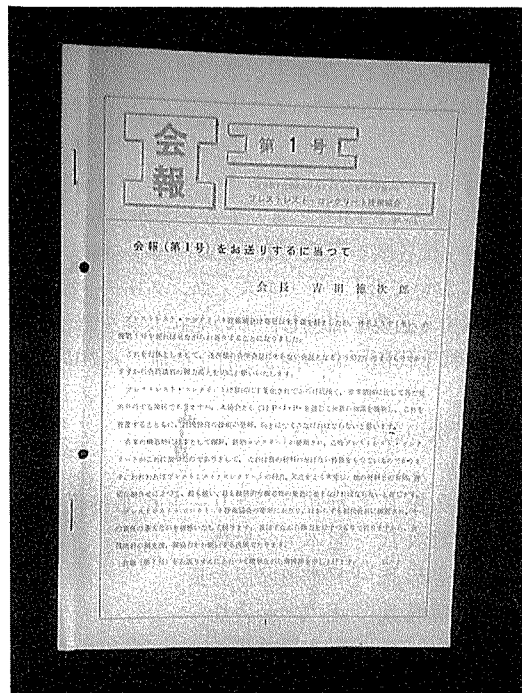


写真-1

ら日尚浅く、欧米諸国に比して甚だ見劣りのする現状であります。本協会としてはF.I.Pを通じて世界の知識を吸収し、これを普及するとともに、我国独自の技術の発展、向上につくさなければならぬと思います。

在来の構造物には主として鋼鉄、鉄筋コンクリートが使用され、近時プレストレスト・コンクリートがこれに加ったのであります。われわれはプレストレスト・コンクリートの利点、欠点をよく考究し、他の材料との有効、適切な組合せによって、最も強い、最も経済的な構造物の築造に進まなければならないと存じます。

プレストレスト・コンクリート技術協会の発足にあたり、はからずも初代会長に推薦され、その責任の重大なるを痛感いたして居ります。及ばずながら微力を尽すつもりで居りますから会員諸君の御支援、御協力をお願いする次第であります。

会報(第1号)をお送りするにあたって簡単ながら御挨拶申し上げます。以上

(著者注：吉田会長の挨拶に続いて、会報はPC技術協会の発端とその経過について次のとおり報告している。)

昭和32年7月末、アメリカのサンフランシスコ市において開催された「World Conference on Prestressed Concrete」に

日本からの出席者に対し「The International Federation of Prestressing」(略称 F.I.P.) の書記長である Philip Gooding 氏より日本においても F.I.P. に加入できるグループの設置を要望された。

ピー・エス・コンクリート工業は世界的にもまだ若い工業であるが、その発達は日進、月歩の現状である。一方わが国においては戦后初めて工業化され、天然資源に恵まれない国情にとって最も適当なコンクリート工法として、今や一般の認識も深まり需要も次第に増加しているが先進諸外国に比すると、遅れていることは否めない。従って世界の水準に一日も早く到達して、この工業のわが国における健全な発達をはかる為には、ピー・エス・コンクリートの国際連盟である「F.I.P.」に加入することが急務と考えられる。「F.I.P.」は各国を代表する「グループ」の集りであるからわが国においても「ピー・エス・コンクリート振興グループ」を組織する必要を痛感し、その発起人会を昭和33年2月1日、東京都千代田区丸の内3丁目2番地、丸の内会館で開催した。

発起人は次の諸氏であった。

土木関係

- 平井喜久松氏 興和コンクリート(株)取締役社長
- 鈴木 雅次氏 日本大学教授
- 岩沢 忠恭氏 日本道路協会会長
- 内海 清温氏 土木学会会長
- 吉田徳次郎氏 学士院会員
- 平山復二郎氏 ピー・エス・コンクリート(株)取締役社長

建築関係

- 武藤 清氏 東京大学教授
- 坂 静雄氏 京都大学教授
- 吉田 宏彦氏 福井大学教授
- 加藤 六美氏 東京工業大学教授
- 佐藤 武夫氏 日本建築学会会長
- 竹山謙三郎氏 建設省建築研究所長

この会合の結果、プレストレスト・コンクリート技術協会を創立することになった。P.C.振興グループの発起人がそのままプレストレスト・コンクリート技術協会の発起人となり、会員を募集し82名となったので、昭和33年2月21日丸の内会館においてプレストレスト・コンクリート技術協会の創立総会が開催された。

出席者は、総会員数82名中62名であった。

議題は

- (イ) 設立経過の報告
- (ロ) 規約の決定
- (ハ) 役員を選任
- (二) 協会運営方針の討議

であって創立世話人平山復二郎氏を議長として開催し、議案(イ)は平山世話人より報告された。議案(ロ)は協会名称を「プレストレスト・コンクリート技術協会」とすること。会員資格については字句修正の上可決した。

議案(ハ)においては次のように会長、副会長が指名され、満場異議なく決定した。なお理事については会長、副会長にその人選を一任することに決定した。

会長 吉田徳次郎
副会長 坂 静雄
議案(ニ)については今後更に理事会において協議することに決定した。

ついで会長、副会長は何れ増員する予定のもとに、差当り次の4氏を理事に推薦した。

- 理事 竹山謙三郎氏
- 理事 加藤 六美氏
- 理事 木村又左衛門氏
- 理事 海上秀太郎氏

以上が会報第1号に掲載されているPC技術協会(以下、本協会)の創立の経緯であり、以後この日、すなわち昭和33年(1958)2月21日をもって本協会の創立年月日とされている。

なお、理事増員については、同年7月と8月の理事会において次のように推薦されている。

- 理事 細井 潤三氏 日本セメント研究所長
- 理事 浅野 忠氏 小野田セメント研究所長
- 理事 横山 不学氏 横山建築構造設計事務所長
- 理事 猪股 俊司氏 極東鋼弦コンクリート振興(株)
- 理事 田原 保二氏 建設省土木研究所
- 理事 福田 仁志氏 東京大学農学部教授
- 理事 友永 和夫氏 国鉄構造物設計事務所長

このときの協会所在地(事務局)は候補にしていた予定先が折衝の結果実現できず、協会発起人で世話役をしていた平山復二郎氏の計らいで、とりあえず「東京都千代田区丸の内3丁目8番地(ピー・エス・コンクリート(株)内)」の一室を根拠とし、協会活動が始められたのであった。通称三菱仲通りと言われたこの一帯は、大正末期から昭和初期に完成した練瓦造りの洋風建物が並ぶエキゾチックなビジネス街であった。ところが日曜、祭日などはほとんど人影はなく、休日出勤でもする者には当時映画の題名で流行語になっていた「ローマの休日」出勤などと冷ややかに言う人もいた。

創立年の7月理事会では、議事(1)専従者の件、「日笠育夫氏を書記長として専従者とする」議事録があり、PC技術協会の初代事務局長である。同氏は社団法人への改組、事業の強化、会員の増員計画など、その円滑な手腕と豊富な経験によって協会の基礎づくりに貢献された温厚篤実の人であった。

協会住所はその後4回ほど移動して現在に至っているが(表-1)、千代田区丸の内時代は、理事会、会誌編集委員会など諸会合にはそのつど、丸の内会館、建築会館(元日本建築学会：中央区銀座)、交通会館、土木学会などの会議室をお借りしていたので、やりくりと不便なことはしばしばであった由に伝え聞いている。

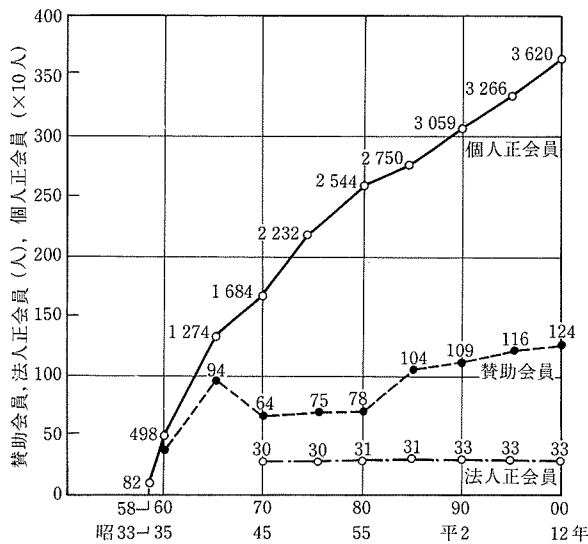
表-1 PC技術協会 事務所の変遷

年 月	事務所の住所
1958. 4	東京都千代田区丸の内3丁目8番地(ピー・エス・コンクリート(株)内)
1960.12	東京都中央区銀座東2丁目1番地(銀鹿ビル)
1973. 6	東京都千代田区麹町1丁目10番15号(紀の国屋ビル)
1987.10	東京都新宿区津久戸町4番6号(第3都ビル)
(1994. 7)	ビル内移動：9F→5F(住所変更なし)

3. 社団法人への改組

任意団体であった本協会は、1959年4月30日の定時総会で、なお一層PC技術に関する学術、調査研究ならびに国際交流によるその成果の普及と振興を図るため、民法第34条による社団法人への改組が決議された。よって同年12月2日「社団法人プレレストコンクリート技術協会設立許可申請書」を建設大臣宛提出した。そして翌年の昭和35年(1960)3月29日に許可された。

このときの会員数は498名であったが、その後協会活動が盛んに行われることで次第に会員は増え、順調に推移してきた(図-1)。



(注) 昭和44年度に法人正会員制を設け分離。

図-1 会員の推移

なお、社団法人PC技術協会設立許可申請の際の発起人は次のとおりである(敬称略)。

発起人代表者 吉田徳次郎

発起人 坂 静雄, 海上秀太郎, 加藤 六美,
木村又左衛門, 竹山謙三郎, 田原 保二, 友永 和夫

次に、歴代会長氏名を表-2に示す。

表-2 歴代会長

初代 吉田徳次郎 (昭33.2~35.4)	2代 坂 静雄 (昭35.4~37.5)
3代 友永 和夫 (昭37.5~38.5)	4代 坂 静雄 (昭38.5~40.5)
5代 松田 俊正 (昭40.5~42.5)	6代 吉田 宏彦 (昭42.5~44.5)
7代 田原 保二 (昭44.5~46.5)	8代 大島 久次 (昭46.5~48.5)
9代 仁杉 巖 (昭48.5~50.5)	10代 梅村 魁 (昭50.5~52.5)
11代 山田 順治 (昭52.5~54.5)	12代 鳥田 専右 (昭54.5~56.5)
13代 河野 通之 (昭56.5~58.5)	14代 小倉弘一郎 (昭58.5~60.5)
15代 猪股 俊司 (昭60.5~62.5)	16代 中野 清司 (昭62.5~平1.5)
17代 君島 博次 (平 1.5~ 3.5)	18代 六車 熙 (平 3.5~ 5.5)
19代 池田 尚治 (平 5.5~ 7.5)	20代 本岡順二郎 (平 7.5~ 9.5)
21代 藤井 學 (平 9.5~ 9.9)	22代 鈴木 素彦 (平 9.9~10.5) 代行
23代 田邊 忠顯 (平10.5~)	

本協会の加盟団体などは次のとおりである(学協会は除く)。

① FIP (現 fib) 1958年5月

② 日本学会議会員 1994年7月

③ 特許庁学術団体指定 1998年10月

4. FIP について

1958年2月に創立した本協会は、直ちにFIP (Fédération Internationale de la Précontrainte) の入会手続きを行った。同年4月の初めには正式決定の見込みがついたので、同年5月5日~10日、ドイツのベルリンにおいて開催される「第3回FIP大会」に日本の代表が出席することになった。

出席者は、欧州滞在中の坂 静雄副会長と三田村保武正会員(ピー・エス・コンクリート(株)専務取締役)を推薦して、両名が出席された。これによって本協会は1958年5月、日本を代表するFIPの会員となった。当初FIPの年会費は、本協会の正会員1人あたり300円であったが、今回のFIP大会での総会でその国の負担額は会員数に関係なく、セメント生産量の比率によることに改正された。このため、わが国の年間負担額は約20万円になることから、本協会の実情を述べ負担額の低減交渉を行った経緯がある。隔世の感を禁じ得ない。

FIP耐震構造委員会 (Seismic Structures) の委員長は歴代日本が担当しており、初代 武藤 清先生、2代 坂 静雄先生、3代 猪股俊司先生、4代 中野清司先生、5代は六車 熙先生が就任され現在に至っている。

猪股先生はFIP副会長に任ずるほか同理事であったので、FIPに関する事項は永年猪股先生にお願いしていた。猪股先生は1987年5月、本協会第15代会長を退任された際、すでに本協会理事および会誌編集委員長であった池田尚治先生(横浜国立大学教授)に引き継がれた。以来池田先生は、FIP副会長、同理事、幹部会委員として、FIPの重要な運営方針ならびにCongressやSymposiumの開催に関する審議などを行っておられる。

FIPでは、CongressやSymposiumの開催地の会場において、とくにFIP活動に大きく貢献された方々にメダルを授与している。わが国では次の方がメダルと賞状を受賞されている(表-3)。

表-3 メダル受賞者

Freysinet Medallists	
昭和61年(1986)	猪股 俊司
FIP Medallists	
昭和49年(1974)	猪股 俊司
昭和57年(1982)	中野 清司
平成5年(1993)	六車 熙
平成5年(1993)	池田 尚治
平成9年(1998)	森元 峯夫

1990年代に入るとFIPとCEB (Comité Euro-Internationale du Béton : ヨーロッパ国際コンクリート委員会) との統合問題について論議されるようになった。長い紆余曲折の道程を経て、1998年5月23日~29日、オランダのアムステルダムにおいて開催された「FIP第13回大会」の時をもって統合され、新しく「fib」(fédération internationale du béton : 国際構造コンクリート連合)となった。1952年8月29日、イギリスのケンブリッジで結成された「FIP」は、高度なPC技術と優れたPC構造物を世界各国に普及しつつ46年の歴史を刻ん

で、さらに新しく「fib」として発展することになった。

わが国では、fibメンバーに(社)PC技術協会(旧FIP会員)と(社)日本コンクリート工学協会(旧CEB会員)が共同して参加することになった。

第1回fib Congressは、「Concrete Structures in the 21st Century」と題して、2002年10月13日～19日の会期で、大阪市北区中之島、大阪国際会議場において開催される。これまでのFIPでは、Congressの開会の際に使用されてきたと思われる「Bell:鐘」があって、その鐘はそのままfibに引き継がれて現在では本協会が預かっている(写真-2)。先般この鐘を拝見することができたが、2002年にはわが国において初めて、祝鐘の響きを想像するだけで感激のあまり身ぶるいする思いであった。

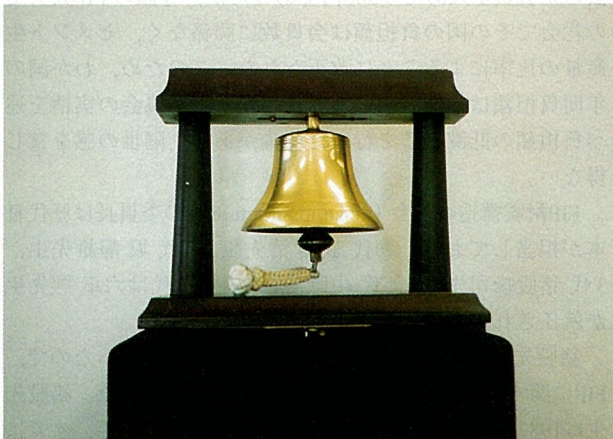


写真-2

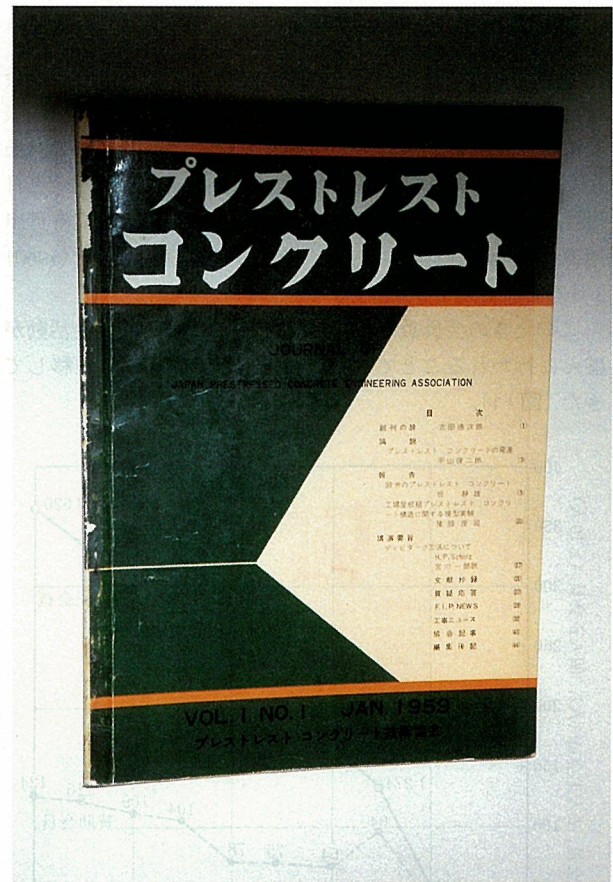


写真-3

5. 協会の主たる事業

5.1 会誌の発行

会誌「プレストレストコンクリート」第1巻、第1号(Vol.1, No.1)は昭和34年(1959)1月30日に発行している。協会創立から僅か9ヵ月後に、わが国に初めて実現したPC文化財というべき学術専門誌の創刊号である(写真-3)。

本協会は、「PC技術に関する各般の事項にわたりその普及と振興を図るを目的とする」ことから、この「目的」を達成するために「事業」があって、会誌の発行は重要な事業の一つであった。当時の編集委員は6名～11名で(表-4)、第1回編集委員会は、1958年10月31日千代田区丸の内、丸の内会館において開催している。出席者は(敬称略)、委員長：猪股俊司、委員：中野清司、同：国広哲男、同：宮川一郎の4名で、議題は会誌の表題、表紙、原稿用紙、第1巻第1号の編集、同2号の計画などが討議されている。協会はまだ仮事務所の状態であったことから、編集委員会もそのつどどこかの会議室を借用する具合であった。ようやく事務所探しに目途がついたのは1960年12月で、年末の27日「東京都中央区銀座東2丁目1番地(銀鹿ビル)」に移転した。この事務所では数名でいっぱいになる会議室であったが、時間に気兼ねはなく夜遅くまで議論したものだと言われている。

会誌Vol.1は、当初から季刊ということでNo.1～No.4に

表-4 会誌第1巻の編集委員会(敬称略)

編集委員長	猪股 俊司	極東鋼弦コンクリート振興(株)	
委員	中野 清司	建設省 技官 建築研究所	No.1～No.3まで
〃	六車 照	京都大学 講師 建築学教室	
〃	小寺 重郎	国鉄技師 構造物設計事務所	
〃	宮川 一郎	住友電気工業(株) 東京支社	
〃	国広 哲男	建設省 技官 土木研究所	
委員	中村 正平	建設省 技官 土木研究所	No.4より
〃	菅原 操	国鉄 施設局 土木課	
〃	松野 操平	日本道路公団 名神高速道路課	
〃	今井 勤	別子建設(株)	
〃	本岡順二郎	日本大学 工学部 建築学教室	
〃	宇多田正純	オリエンタルコンクリート(株)	
〃	池田 永司	ビー・エス・コンクリート(株)	

しているが、Vol.2以降は隔月発行年6回(No.1～No.6)に編集されている。Vol.8, 9は年4回、Vol.10, 11は年5回に減らさざるを得ない一時期(1967年～1970年)はあったが、それ以降は定期刊行に支障なく発行されてきた。

会誌の装いが一新されたのは、Vol.26, No.1(1983年)からであった。会誌編集委員長、池田尚治先生は、会誌Vol.42, No.1の中で『会誌の編集委員長に就任して最初に実施したことは、会誌の表紙を一新させて会誌を魅力的なものにすることであった。そこでPC構造物のカラー写真を表紙に採用することと、会誌の記事の目次概要を表紙の下側に印刷し、一見して記事の項目が分かるようにすることを提案した。また、会誌名称「プレストレストコンクリート」の下にサブタイトル「PCとコンクリート構造」をつけることにした』と述べられていることから、現在に見られる魅力

的な充実した会誌となった。

1996年頃から他誌において、本文記事の中にカラー写真が用いられるようになり、本協会にもVol.40, No.1 (1998年)より試みに1題あたり1枚のカラー写真を採用するものとした。また、1996年から中央省庁の行政サイズがB5判からA4判に改訂されたのを機会に会誌もVol.40, No.1からA4判に改めた。

顧みればいくたびかの社会情勢の変遷とその影響を受けることもある中で、堅実に魅力ある会誌を刊行されていることは、熱心に奉仕活動をされる俊秀の編集委員およびわが国で最もPC工学に碩学の歴代編集委員長のご活躍にほかならない(表-5)。

表-5 会誌 歴代編集委員長

歴代	氏名	期間	編集巻・号	
初代	猪股 俊司	1959~1974	1.1~16.3	(株)日本構造橋梁研究所
第2代	神山 一	1974~1976	16.4~18.6	早稲田大学 教授
第3代	本岡順二郎	1977~1977	19.1~19.4	日本大学 教授
第4代	西澤 紀昭	1977~1983	19.5~25.2	中央大学 教授
第5代	池田 尚治	1983~1990	25.3~32.2	横浜国立大学 教授
第6代	山崎 淳	1990~1997	32.3~39.6	日本大学 教授
第7代	辻 幸和	1997~現在	40.1~	群馬大学 教授

5.2 PC技術協会賞(授与)

PC技術協会賞は、本協会第2代、第4代会長を務められた坂 静雄博士が1972年に、学者者にあつては最高の荣誉とされる「学士院会員」になられたのを記念して、坂博士からのご寄付金を基金に、本協会では「坂博士研究奨励金制度」が設けられた。この制度は年間の優れた論文、作品、研究等の優秀と目されるものに奨励金を授与してPC技術の向上に、ひいては業界の発展に寄与する趣意で始められた。最初は1973年の論文賞に始まり、1977年から作品賞、1988年から技術開発賞が加えられて現在に至っている。授与件数および種別は表-6にまとめてみた。

授与式は本協会の通常総会に組まれており、総会終了後には受賞者を囲みなごやかに懇談されるが、技術談義になると溢れる情熱で展開されている。

表-6 受賞件数と内訳

年度	賞名	受賞件数			
自1973年至2000年	論文賞	63			
自1977年至2000年	作品賞	76	橋梁	建築	その他
			58	10	8
自1988年至2000年	技術開発賞	28	20	2	6

5.3 PCの発展に関するシンポジウム

PCの発展に関するシンポジウムは、昭和35年(1960)に第1回「研究発表会」を開催したのが嚆矢とされ、会誌編集委員会の所轄事項で実施したものであった。会期は1日ということから発表講演は約30題前後として毎年都内の会場で開催してきた歴史のある事業であった。

平成2年(1990)は第30回になるのを記念して、当時編集委員長であった池田尚治教授の提言によって、「シンポジウ

ム」形式にすることに改められた。主な内容は、

- ① プレストレストコンクリートの発展に関するシンポジウムとする
- ② シンポジウム実行委員会、同幹事会を新設する
- ③ 会期は2日間とする
- ④ 会場は地方都市(持回り)とする
- ⑤ 特別講演者、論文発表者ならびに参加技術者等が自由に情報の交流ができる時間帯を設定する

などであった。これまでの「研究発表講演概要」は、「プレストレストコンクリートの発展に関するシンポジウム論文集」とし、巻末に著者索引をつけた。また、第2回目の論文集からは海外にも文献として紹介できるよう、英文の題目と著者名が加えられた。

今年は第10回を迎えることになるが、すでに論文原稿は173編と伺っている。本シンポジウムは毎年盛況に推移しており(表-7)、主催者と参加者の領域を超えた合体事業で、PC技術協会の一角を担う役割となっている。

表-7 プレストレストコンクリートの発展に関するシンポジウム(推移)

	開催年月	都市	会場	(株)論文	出席登録者
第1回	平成2年10月	金沢市	金沢市文化ホール	(4) 87	270
第2回	平成3年11月	奈良市	奈良県新公会堂	(2) 72	295
第3回	平成4年11月	福岡市	福岡市博物館	(2) 86	352
第4回	平成6年10月	札幌市	札幌ガーデンパレス	(2) 90	332
第5回	平成7年10月	松江市	国びきメッセ	(2) 107	429
第6回	平成8年10月	名古屋	名古屋国際会議場	(3) 128	568
第7回	平成9年10月	秋田市	秋田市文化会館	(2) 158	596
第8回	平成10年10月	松山市	松山市総合コミュニティセンター	(2) 160	560
第9回	平成11年10月	長野市	長野市メルパルクNAGANO	(2) 170	589
第10回	平成12年10月	兵庫県	淡路夢舞台国際会議場	(2) 173	

()内は特別講演

5.4 PC技術講習会

PC技術講習会は30年に近い歴史のある年次事業である。当初は会員をはじめ、一般の建設技術者にもPC技術を啓発し、向上を図ろうということで昭和46年(1971)に初めて東京(11月26日、於発明会館)、大阪(同30日、於科学技術センター)の2会場において、総合題目は「PC構造物の設計法と現況」のもとに6講師により開催した(表-8)。本協会第150回理事会(1971年12月7日)議事録に「講師も驚く程熱心に聴講され……東京313名、大阪278名」とあり、誠に盛況であったとされている。

表-8 第1回PC技術講習会(目次)

プレストレストコンクリート構造物の設計法と現況 PC構造物に強くなるための講習会		
プレストレストコンクリートの特質	(株)日本構造橋梁研究所 工博	猪股俊司
プレストレストコンクリート用の材料	京都大学工学部 教授 工博	六車 照
設計法の基本	京都大学工学部 教授 工博	岡田 清
土木構造物の設計計算例	早稲田大学理工学部教授 工博	神山 一
建築構造物の設計計算例	建設省建築研究所 第4研究部長 工博	中野清司

これを第1回としているが、次第に各地から要望されることになって、現在行われている1日日程の東京、仙台、名古屋、大阪、高松、広島、福岡の7都市と、半日日程で行わ

表-9 PC技術講習会 出席者の推移

開催都市	第1期(年)	出席	第2期(年)	出席	第3期(年)	出席	計	回数	回平均
東京	1971~1980	2 579	1981~1990	6 489	1991~2000	5 870	14 938	28	534
仙台	1973~1980	1 512	〃	2 791	〃	2 910	7 213	27	267
名古屋	1974~1980	2 495	〃	5 579	〃	5 140	13 214	25	529
大阪	1971~1980	1 425	〃	3 658	〃	4 810	9 893	27	366
高松		—	〃	2 147	〃	2 283	4 430	20	222
広島	1977~1980	728	〃	1 791	〃	2 490	5 009	24	209
福岡	1973~1980	2 613	〃	5 724	〃	6 547	14 884	26	572
札幌		—	1983~1990	2 309	〃	2 560	4 869	18	271
新潟		—	1981~1990	2 235	〃	2 650	4 885	20	244
計		11 352		32 723	〃	35 260	79 335		

(注) 第1回開催が1971年(昭和46)であったので、10年間を1期とした。

れている札幌、新潟の2都市に定着したのは1970年代の後半あたりであった。

講習会における講師は、学界と関係諸団体ならびに産業界の学識経験者をお願いしている。講習会当日の出席者、また、その日の都合による欠席者にも後日十分学習ができるテキストを作成して講演されるので、講師各位にはなかなか負担となる公益活動になっている。

第1回PC技術講習会から第16回まで(1971年~1988年)筆頭講演をされていた猪股俊司先生は、会誌Vol.30, No.1(1988年, 1月・2月号)「歴代会長寄書」に寄せられた記事で『……私自身当初から(テキスト)毎回原稿を書いてきましたが、毎年題目を変えて執筆するのはなかなか大変なことでありました。しかしPC技術者の裾野を広げるために多少なりともお役にできれば……』と述懐され、猪股先生のPC技術に関する情熱と公益活動は、現在にも諸先生方に受け継がれている。今年2月のPC技術講習会は28回を重ね、毎年全会場とも盛況に終始されてきたことは、講師をご承引くださった諸先生方をはじめ、協賛：(社)PC建設業協会、後援：(社)土木学会、(社)日本建築学会、(社)全日本建設技術協会、(社)セメント協会、(社)日本コンクリート工学協会、(社)建設コンサルタント協会からのご協力があり、また、開催都市にはPC建設業協会の各支部があって、関係先への案内、会場の確保と当日の設営など各支部委員のご活動がある。関係各位に深く感謝を奉げるものである。

30年近く続けてきたPC技術講習会の推移はどうであったか、年度と会場別の出席者集計を試みたが誌面の都合でやや省略したものになった(表-9)。これまで累年出席者総数が8万人近いということは、PC技術に関する高い関心と意欲を示すもので誠に喜ばしいことである。

6. おわりに

PC技術協会について、草創期のことや主たる事業につい

て述べたが、このほか重要な各種技術委員会、また、PC技士資格制度などがある。

各種PC技術委員会は、PC技術に関する学術、調査、研究に基づく活動であって、その成果は社会基盤の構築、ならびに整備などに広範囲の分野において活用されている。

PC技士資格制度は、「PCの計画、設計・施工および管理に関する業務に携わる技術者の資格を定め、その技術の向上を図ることによりPC構造物の品質を確保し、もって社会の進歩発展に寄与」する目的で、1994年に発足したものである。これらPC技術協会の事業活動はますます公益に寄与し、かつその役割の期待もまた大きなものになっているものと思われる。

参考文献

- 1) PC技術協会：会報，第1号，PP.1~8，1958
- 2) PC技術協会：理事会(役員会)議事録，1958~2000
- 3) PC技術協会：30年の歩み，1987
- 4) プレストレストコンクリート技術協会：協会記事，Vol.1, No.1~4，1959
- 5) プレストレストコンクリート技術協会：協会記事，Vol.2, No.1~2，1960
- 6) 猪股：第8回FIP大会特集号—FIPとは—，プレストレストコンクリート，Vol.21, No.1, p.4，1979
- 7) 猪股：(社)プレストレストコンクリート技術協会創立30年を迎えて，プレストレストコンクリート，Vol.30, No.1, pp.24~25，1987
- 8) 本岡：編集委員会の思い出とPC建築の今後，プレストレストコンクリート，Vol.42, No.1, pp.26~27，2000
- 9) 池田：PC技術の発展に寄せて，プレストレストコンクリート，Vol.42, No.1, pp.32~33，2000
- 10) 山崎：平成2年(1990)3号~平成9年(1997)3号 編集委員会の思い出と将来展望，プレストレストコンクリート，Vol.42, No.1, pp.34~35，2000
- 11) 池田：第21回PC技術講習会，世界のプレストレストコンクリートの動向，pp.1~2，1993
- 12) 池田：第22回PC技術講習会，新しいPC技術の展開，pp.1~2，1994
- 13) 池田：第26回PC技術講習会，プレストレストコンクリートの世界の動向，pp.2~3，1998
- 14) 池田：第27回PC技術講習会，プレストレストコンクリートの発展と技術開発，pp.15~16，1999

【2000年8月30日受付】